
公爵と王女

くま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

公爵と王女

【Nコード】

N0580Z

【作者名】

くま

【あらすじ】

「褒美を取らせる 王女を妻に迎えよ」

王のその一言で滅んだ国の王女を妻に迎えることになった公爵の話。

邂逅

美しきエルバータ、白亜の城。

かつて歴史と繁栄の証、イーデン国の誇りと謳われたエルバータ城は今や廃墟と化した。

城内には活気にあふれた人の声どころか、嘆きの声すら聞こえない。

あるのはカツカツと床を叩く軍靴の音と、別の国の言葉。

「陛下、この先でございます」

此度の戦では先陣を切り、エルバータ城に入城した將軍が恭しく先導する相手は、ただ一人の主たるフェイアン国王だ。

齡五十を目前にしながらもその足取りに乱れはなく、つい先ほどは見事な剣技を披露してみせた。

ためらうことなくイーデン王を下した姿に誰もが忠義心を深めた。そのうちの一人である、フレイヴィアスは重い気を引きずりながら、先を行く主、同じく近衛騎士を拝命している同僚の背中を最後尾から眺めた。

「この扉の先です」

彼らの王、將軍、王の護衛たる近衛が向かう先は、ただ一つ。

落城したエルバータ城の中で唯一、落とされなかった場所。

死を目前にしたイーデン王の口から語られたその場所は、道を知る者にしかたどりつけない場所であり、イーデン王が何よりも隠したかったものが収められた場所だ。

將軍が扉を開ける際に王は、下がり、代わりに未だ手柄を立てていない近衛が野心を持って前へと進み出る。

すでにイーデン国の王太子の首を跳ねたことにより誰よりも手柄を立てたフレイヴィアスは、相変わらず最後尾にいた。

ギイ、と黒色の重厚な木扉がゆっくりと音を立てて開き、室内の様子が露になる。

「……っ」

そば近く、誰かが息を呑んだ音を聞きながら、フレイヴィアスじつと室内の一点を見つめた。

室内は、少し薄暗かった。

凡そ貴人の部屋とは思えぬほど室内は狭く、中に置いてある物は中央に寝台が一つきりしかなかった。

後宮に住まう身分低い妾ですらもつとまともな部屋を持っているだろう。

それほどこの部屋異様だった。

そして何よりも部屋の中央にある寝台の淵には腰掛ける一人の女の姿があった。

女を警戒する以前に誰もが彼女に見惚れた。

薄暗い中はずきりと浮かび上がる波打つ黄金の髪、大きな緑色の瞳、白いドレスから僅かに覗く肌は白く透き通るようだ。

未だ少女といってもいい年でありながら傾国と謳われてもおおしくない美しさだった。

一同が立ちすくむ中、進み出たのは下がっていたフェイアン王だった。

「ああ、間違いない……エリーザ姫だ」

フェイアン王の言葉にその場にいた者ははっと我に返った。

そして慌てて王の後に続いて室内へと足を踏み入れる。

エリーザと呼ばれた王女は微かに目を伏せ、頷いた。

「……お久しぶりでございます、陛下」

王女の美しい容貌に似合いの軽やかな声音。

しかし、寝台に腰掛けたまま口を開いた姿にフェイアンの者たちは眉をひそめた。

痴れ者が、己の立場も分からぬとは。

誰かがぼそりと呟いたが、それを咎める者はいなかった。

平素であれば一国の王女にこんな口を聞けばただでは済まないが、既に王女の国は彼らの国に滅ぼされたも同然。

王女という身分など、ないに等しかった。

「 エリーザ、私がここに居る理由がわかるかな」

フェイアン王自身は、王女の態度を気にする風もなく、静かに問いかけた。

王女はその問いにやはり目を伏せたまま、頷いた。

「我が国が、貴国に負けたのでしよう」

「そうだ。イーデンの領土はすでに我がフェイアンの手に落ち、最後の砦であったこのエルバータ城もつい先ほど落ちた。王太子であったそなたの兄をはじめ、従兄弟らも皆処刑したばかりだ。もちろん王であったそなたの父も」

王の言葉に王女の肩が微かに震えた。

だがそれだけだった。

王女はこの部屋に入ったときから、ほとんど身動きしない。不自然なほどに。

それに気付いた者がこの場に何人いるか、フレイヴィアスは黙したまま哀れな敗国の王女を見つめた。

「エリーザ。死に目にあえなかった哀れなそなたにイーデン最後の王の言葉を伝えよう」

フェイアン王は、目を伏せたまま上げようとしない王女に笑みを向けた。

柔らかでありながら、残酷さを秘めた笑みを。

「 どうか王女の命だけは奪わないで欲しい」

一国の王が、己の国を滅ぼす王に泣いて縋つてまで願ったこと。それ以外は望まない、と息子である王太子の遺体など目に入っていない様子で娘の助命を請う姿は異様ですらあった。

己で王太子を手にかけておきながらフレイヴィアスは彼を哀れに

思ったほどだ。

王女は、王の言葉に伏せていた目をぎゅっと閉じ、両手のひらを握り合わせた。

命を落とした父王の冥福を祈るためなのか、それともこれからの己の処遇を憂いているだけなのか。

その姿は弱弱しく、儂げだった。

手柄のために王女の首を奪う気でいた者ですらためらいを覚える。だが王はその姿に惑うことはなく、嗤うのみ。

「イーデン王はよほどそなたを愛していたと見える。息子などよりも娘であるそなたを　　いや、娘ではなく女としてか」

暗に親子の関係を揶揄する王の言葉に王女は相変わらず動かない。両手のひらを握ったまま目を閉じるだけ。

「否定もせぬとは……何ともつまらないことだ」

王は呆れたように呟いた後、おもむろに足を踏み出した。

突然の行動に誰もが対応に遅れた。

王は一人悠然と寝台に腰かける王女へと歩み寄ると、その左腕を掴み上げた。

「陛下?!」

將軍らが声を上げる中、抵抗する間もなく王女の体は寝台から浮き、直近の床へと叩きつけられた。

肉が床とぶつかる音がして華奢な体が倒れ、ふわりと白いドレスが広がる。

しどけなく乱れたドレスの裾からは真っ白な脚が現れた。

誰もが息をのんで肌の美しさに見入り、しかし次いでほっそりとした足首に巻かれた銀の鎖に目を剥いた。

やはりな　　と呟き王は顔を歪めた。

「愛など度が過ぎると醜悪でしかないものだな」

誰が想像できるだろうか、一国の王女が囚人のように鎖に繋がれているなど。

そして王女を繋ぐことができる人物は、ただ一人

彼女の

父王しかいない。

同時に聡い者は気付くのだ。

彼女が寝台から身動きしなかった理由が、これの存在のためである。

王に不敬を働いてまで隠したかったもの。

もしかしたら王女は、最初の王に対する態度を不敬として処刑されることすら望んでいたのかもしれない。

なぜそうまでして隠したかったのか。

フレイヴィアスは一人考えを巡らせた。

見つめる王女は屈辱のためか、羞恥のためか唇を噛みながらもろのろと体を起こした。

か弱い姿にも揺らぐ王は王女を見下ろした。

「エリーザよ、なぜこの鎖を隠した」

「……………くだらない理由です。陛下にお聞かせする価値もありません」

「構わぬ、言え」

首を振るも追及の手を緩めない王に王女は諦めたように微かに首を振った後、床に座り込んだまま顔を上げた。

白い面には何の感情も見えなかったが、ただ伏せられたままだった緑の瞳だけが強い光を宿していた。

しっかりと王を見据えながら、

「己の王女としての誇りのためです」

揺るぎない口調で言い切った。

鎖に繋がれた醜悪な姿、それを晒すぐらいならば不敬として敵国の手にかかるほうがよいと。

自害を禁忌とするイーデン国最後の王女は、言い切ったのだ。

フェイアンの者たちはこれほど美しい者を他に見たことがなかった。

そして同時に惜しいと思った。

滅んだ国の王女ではなくなぜ自国に生まれなかったのかと。誇り高い姿に初めて王は心からの笑みを浮かべて頷いた。

「見事だ、それでこそイーデン最後の王女」

満足げに呟いた後、王は一度目を閉じた。

そして一転次に目を開けて告げた言葉は、

「それでは、そろそろそなたの処分を言い渡そうか」

ひやりとしたものを纏っていた。

王の言葉にフレイヴィアス以外の者は息を呑んだ。

処分、それによつては己の立てる手柄が増える。

皆が固唾をのんで見守る中、王は淡々と言葉を続けた。

「イーデン王は、そなたの助命を請うたが、滅ぶ国の王の言葉を聞き入れる義務などない。私は、民を虐げる王族、貴族に生きる価値などないと思つている」

「……………」

「それゆえ、王を諫めることすらしなかった王女など救う気などなかったが 己の処遇を理由に命乞いをしなかったそなたを見て気が変わった」

王は微笑した。

「処刑は行わぬ」

誇り高い王女の姿が王の心を動かしたのだ。

王の宣言をフェイアンの者たちは残念に思った。

これで手柄を立てる機会を失った。

だが王の次の言葉に色めき立つ。

「だが、処刑の代わりに降嫁させることにする」

既に滅んだ国の王女の身分など何の価値もない。

しかし後々の火種にならないよう降嫁させて王女の身分を奪うのだ。

美貌の王女を妻とすることができるとも思えない。そのことを期待してフレイヴィアス以外の者は唾を飲み込んだ。

「異論は許さぬぞ」

敗戦国の王女に反論など端から許されない。

王女は顔をうつむかせ、頷いた。

フェイアンの者もまた王に恭順の意を表した。

王は腕を組み、王女に問う。

「降嫁先だが、望む相手はあるか」

王女はうつむいたまま首を振った。

「ごさいません……」

そう言ったあと、ですが、と口の中で呟いた。

「申せ」

「では……許されるならば、未だ奥を持たぬ方を望みます」

未婚者を望む王女の言葉は思いも寄らなかつたらしく王は瞬いた。

「それはなぜだ」

「……私の存在は、迎えるてくださる相手の方に多大なご迷惑をおかけするでしょう。未婚の方のほうが既婚の方よりもそれが少しでも少ないのではと。浅知恵ではごさいますが」

確かに既婚者よりは未婚の者のほうが何かと都合がよいだろう。

イーデンもフェイアンも妻を多数持つことは認められているが、正妻と妾とでは立場にかなり差がある。

王女を迎えれば必然的に王女が先に迎えた妻を押し退けて正妻の座に座ることになる。

夫は美貌の王女を喜んで迎えるかもしれないが、妻は陰で泣くことになるだろう。

なるほど、と王は頷き思案した。

今のところ王女の望みを退ける理由はない。

「分かった。では未婚の者を選ぶとしよう」

王の言葉に既婚者であるフェイアンの者はあからさまに失望したようだった。

反対に未婚者は期待の眼差しを王へと注ぐ。

未婚者の一人であるフレイヴィアスは嫌な予感がしていた。

フレイヴィアスには他の者のように王女を望む気はさらさらない。

最後尾、王の視界に入るような位置ではないが。

だが、嫌な予感とはなかなか外れないもので、

「フレイヴィアス」

王は微笑を浮かべて振り返った。

同時にフェイアンの者が動いて王とフレイヴィアスを遮る者がないくなる。

「……はい」

心臓は嫌な音を立てていたが、声に変わりはなかった。

「未だ独り身であったな」

「……はい」

「そして此度の戦では民に紛れた王太子を見つけ出して処刑した功労者でもある」

続く言葉は阿呆でも予想がつく。

背中を汗が伝う。

「褒美を取らせる　　王女を妻に迎えよ」

その言葉をどこか遠いところで聞いた。

だが長年の習慣で自然と身体が動き、膝について頭を垂れていた。

「有り難き幸せ」

意思とは関係なく動いた唇に王は満足げに頷いた。

垂れた頭に向けられるのは周囲からの多大な嫉妬だった。

代われるならばフレイヴィアスとて代わりたい。

だがそんなことが許されるはずがない。

恐る恐る顔を上げたフレイヴィアスの目に飛び込んできたのは床に座り込んだままの王女。

「エリーザ、これがお前の夫となる男だ」

王の言葉に王女の緑の瞳がフレイヴィアスへと向けられる。

まっすぐに居心地が悪くなるほど汚れないその瞳と初めて目が合う。

これがフレイヴィアス21歳、エリーザ16歳の出会いだった。

降嫁

真っ白な敷布に豊に広がる金糸。

金糸の下から覗く朝日に輝く肌は白く、美しい。

恥じらいながらも微かに上がる色を含んだ声は、艶やかだった。

そして何より

破爪の証。

それがあつたことにひどく驚いた。

「私は……フレイヴィアス・グランテール、フェイアンでは公爵の地位にある者です」

なんとも間抜けな自己紹介からの始まりにフレイヴィアスは内心頭を抱えた。

唯一凱旋の列から外れ、公爵家へと向かう狭い馬車の中、正面に座った王女はフレイヴィアスの言葉に黙したまま長い睫毛を瞬かせた。

つい11日前に褒美として賜ったこの王女をフレイヴィアスは早々からもて余していた。

同盟国であつたイーデンが何を考えたのかフェイアンへと宣戦布告をしたのが1年前、フェイアンの侵攻の手がイーデンの王都まで伸びたのか1か月半前。

その王都も陥落しようかという目前、フェイアン王自らエルバータ城へ赴くとの宣下が下り、王の近衛を務めるフレイヴィアスも戦場に立つことを余儀なくされた。

騎士となつたからには戦場に赴くことなど当然と考えていたため、異論や不満はない。

人を手にかけることに罪悪感が全くないわけではなかったが、それでも己と尊き王のために幾多のイーデンの者を殺した。

だが、誰が戦に赴いた後　　褒美として王女を宛がわれるなどと想像できただろうか。

制圧された王宮内で、捕えられた使用人の中に紛れていた王太子を見つけ出してしまったのがよくなかったのかもしれない。

見つけ出し、首をはねさえしなければ。

そう、フレイヴィアスは王女の兄である王太子を殺したのだ。

そのことは王の口から告げられ、王女も知っている。

王女は、どう思っているのだろう。

己の国を滅ぼした国の人間、何よりも己の兄を手にかけた男のことを。

思えばこの王女と顔を合わせるの、実に10日ぶりである。

王から直々に王女を娶るよう命じられたフレイヴィアスであるが、だからといってあの場ですぐに婚姻を結ぶことはありえない。

フレイヴィアスにはフェイアンに戻るまで近衛としての仕事があったし、王女はフェイアンまで身柄を拘束されていた。

それゆえ、王都に入った途端に凱旋の列から外れて本邸へ直帰するよう命じられたときには驚いたものだ。

王直々の命でなければ理由をつけて拒否するところだが、己むを得ず王女が乗せられている馬車に自身も乗り込み帰宅の途に就いたのであった。

10日ぶりに顔を合わせた王女は、乗り込んだフレイヴィアスに僅かに目を見開いただけで、それ以上の動きはなかった。

今も淡々とフレイヴィアスの説明を聞き、時折静かに相槌を打つだけ。

人形のようにだった。

「……………これから向かっているのは、王宮の東にあるグランティー

ル家の本邸です。私には既に両親もありませんし、もともと兄弟もいませんので誰に気兼ねすることなくお過ごしください」

王宮の東西には貴族街があり、その中でもグランティール家は東の貴族街の一等地に居を構えている。

その建物もフレイヴィアスの祖父が当時のフェイアン王女を娶るに当たって改修したため、どの家にも劣らないものである。

既に祖父母も父母もなく、妻妾を持たないフレイヴィアスにはもて余すほどに広く立派すぎるが、滅んだとはいえ一国の王女を迎えるのに何ら支障はない。

「家財で気に入らぬものがあれば、何なりとおっしゃってくださいばお望みの物を用意いたしましょう」

部屋は、王から命が下った後にすぐに使いを出して亡き母が使っていた部屋を整えさせている。

傷んでいる物は取り替えさせているが、趣味が合わなければそれも取り替えることになるだろう。

幸い両親も祖父母も浪費癖はなかったし、蓄えはある。

王女がよほどの浪費家でない限り、困ることはないだろう。

ありがとうございます、と目を伏せる王女はそれ以上は何も言わない。

「……いえ」

フレイヴィアスもまず説明しておかなければならないことは、終わった。

もともと寡黙なほうであるフレイヴィアスには気の利いた会話や冗談を言う技術はない。

必然、馬車の中は沈黙が支配し、重苦しい。

これから先のことを思うと、憂鬱で仕方がないフレイヴィアスだった。

沈黙の馬車がグランティール家へと辿りつき、その足を止めたの

は夕刻だった。

御者台から降りた従者が扉を開けると、まずフレイヴィアスが外へと降り立った。

邸宅の玄関に家の者が居るのを確認したあと、続いて降りる王女へと無骨な手を差し出すと、真っ白な手が軽やかに乗せられ、中から静かに彼女が出てきた。

慣例通り出迎えに出ていた使用人の多くは王女の容貌に声を失い、礼を失しかけたがすぐさま立て直した。

そんな彼らの中から進み出たのは、父の代から執事を務める男だった。

王女の手を引いたままフレイヴィアスは、執事へと短く帰還を告げた。

執事は主人の様子に嬉しそうに目を細め、

「ご無事で何よりでございます、旦那さま」

頭を垂れるのと同時に他の者が一斉に頭を下げる。

フレイヴィアスは彼らに労いの言葉をかけると、次は王女へと向き直った。

「これが当家の者たちです。何かあればまずあの執事のローグにお申し付けください」

フレイヴィアスの声を受けて執事が王女に頭を下げる。

「よろしくお願いいたします」

王女が執事に小さく頷いたのを確認した後、フレイヴィアスは再び家の者たちへ目を戻す。

既に王女を連れ帰ることは知らせてあるが、これも慣例だ。

「この方は、私に降嫁してくださるエリーザ姫であらせられる。失礼などないよう、心からお仕えするように」

フレイヴィアスの簡潔だが反論を許さない言葉に皆先ほど同じように頭を下げて恭順の意を表した。

それを見届けてからフレイヴィアスは王女の手を引いて邸内へと足を進めた。

「2階に部屋を用意しております。代々の公爵夫人が使っていた部屋で、以前は母が使用していたため気に入らぬ物もありでしょう。先ほども申しましたが、気に入らぬ物はおっしゃってくださいれば取り替えさせましょう」

説明しながら2階へと続く階段へと足を進める。

2階へは邸内にある複数の階段から上がることができるが、これから案内する部屋へは邸内の奥に設置されている階段からしか上がれない。

その説明をしようとしたとき、遮るように王女が初めて口を開いた。

「……………あの、フレイヴィアさま」

口を開きかけていたフレイヴィアスは初めて呼びかけられたことに驚き、足を止めて思わず王女の顔を見た。

大きな緑色の瞳が、どこか困惑したような色を浮かべていた。

「よろしかったのでしょうか……………私自身は、この家の方々にご挨拶を申し上げておりません」

「……………」

「私は無知ゆえ、婚家へのご挨拶の作法も存じません。ですが、初めて会う方にご挨拶も申し上げないのは失礼に当たるのではないのでしょうか」

静かな声で紡がれる王女の言葉にフレイヴィアスは失敗したことを悟って言葉を失った。

確かに王女と使用人との間の身分の隔たりは非常に大きいが、だからと言って頭を下げる者に対して何も返さないのは傲慢であり、愚かなことだ。

それを自分は王女にさせてしまったのだ。

無知はフレイヴィアスのほうだった。

急くあまり失念していたなど言い訳でしかない。

「……………ご意志を確認することなく進めてしまうなど、失態以外の何ものでもありません。エリーザ姫、どうかお許しください」

即座に床に片膝をつき、頭を垂れると、目の前の王女の足が僅かに後ずさった。

「おやめください、私はフレイヴィアさまに謝罪されるような身ではありません」

小さな悲鳴のような声音で言った後、王女もまたフレイヴィアスの前に両膝をつき頭を下げ始める。

「詮無いことを申し上げました、私のほうこそお許しを」

「エリーザ姫、私などに頭を下げてはいけません。あなたはイーデンの王女なのですから」

慌てて王女を立たせ、自身も立ち上がる。

必然己の胸元までしかない王女は、フレイヴィアスを見上げる形になる。

「いいえ、イーデンは既に滅びました。もう私は王女と呼ばれる身分ではありません」

きつぱりとした口調と、強い緑の瞳にフレイヴィアスは僅かに気圧される。

「私はフレイヴィアスさまが敬意を払われるような身ではございません。どうか私のことは、ただのエリーザと」

「それは……では、私にも敬称は必要ありませんので、」

「いいえ、それはできません。私はフレイヴィアスさまに仕える身です」

はつきり言い切る口調と瞳の何と強いことか。

フレイヴィアスは、それ以上の言葉を失った。

本当に、滅んだ国の王女であることが非常に惜しいと思う。

強い瞳で見上げてくる王女をフレイヴィアスは黙って見つめていたが、遠巻きに主人たちの様子を眺める使用人たちの姿に気づき、二人は我に返った。

「……………案内を続けましょう」

「……………お願いいたします」

お互いに取り繕うように言うと、再び足を進めて王女の部屋へと向かった。

階段を上がり、2階の奥へと足を進めると白い扉の前には二人の侍女が控えていた。

主人の姿を見ると、一度頭を下げた後ゆっくりと扉を開く。

途端に飛び込んでくるのは、眩しいまでの赤い光。

大きな窓から差し込む夕日だった。

「ここが使っていたたく部屋になります」

真っ赤な色に染まる室内は広く、最高級の調度品で溢れていた。

王女がいた、あのエルバータ城の部屋とは比べものにならない。

王女は黙ったまま室内へと目向けていた。

「隣が寝室で、寝室は私の私室とも繋がっています」

つまりは、フレイヴィアスも使うという意味である。

その意味は分かっているだろうが、王女は相槌を忘れて、目を瞬かせて室内を見回していた。

王女の様子に、フレイヴィアスは少し不安になった。

「……………お気に召しませんか」

その問いかけに、王女はようやくフレイヴィアスを見上げた。ふるふるとう首を振り、

「いいえ、私にはもつたいないくらい立派だと……………」

ただ、と言いよどむ。

フレイヴィアスは視線でもって王女に先を促した。

見上げる緑の瞳を少し伏せた後、呟いた。

「考えていたのです」

「……………何をでしょうか」

その先の言葉は、フレイヴィアスには思いも寄らないものだった。そして、困惑以外の何ものでもなかったが、口にした王女自身もひどく困惑していた。

いや、途方に暮れていたというべきか。

「私はこの立派な部屋で……これから何をすれば良いのでしょうか」

答えは フレイヴィアスにも分からない。

しばらくの間、二人は無言のまま見つめ合っていた。

どちらも答えを口にすることなく。

その翌日、式を挙げることも祝宴を開くことも誰かを招くこともせず。

フレイヴィアスは、王女を妻とした。

登城

震えている　　夜半、目を覚ますと同時に少し離れたところにある身体を見て思い出す。

最初に床を共にしたときもそうだったと。

迷った末に少し離れたところで猫のように小さく丸まっている身体に手を伸ばし、抱き寄せる。

起きるかと思ったが、ぎゅっと閉ざされた瞼が開くことはなかった。

抱き寄せた身体の震えが止まるまであたためるかのように撫でて続けたのだった。

早朝、フレイヴィアスはグランティール家を出て、王城へと向かった。

イーデンから王都へと帰還してから未だ2日しかたっていない。

戦場からの帰還と婚姻を考慮されて10日ほど休みをもらっているのだが、どうしても登城しなければならぬ理由があったのだ。

街は未だ凱旋の喜びが抜けず、賑やかなものだが、早朝であればそれもない。

共の従者を一人だけ連れ、徒歩で王城へと向かう途中、ほとんど誰ともすれ違うことはなかった。

許可証代わりになる近衛の剣を門番に示すと、中央宮へと足を進めた。

普段ならばまっすぐ近衛の舎がある左宮へ向かうが、今日は中央宮に行かなければならない。

中央宮では貴族に関する様々な手続きを行うことができる。

フレイヴィアスがそこへと向かう理由はただ一つ、王女との婚姻成立を届け出るためである。

これが妾を迎えるだけであれば面倒な手続きは必要ないが、正式な妻を迎えるときは手続きをしておかなければ後々の相続の際に権利を主張できないし、夫婦の間に生まれた子が後継になることもできない。

特にフレイヴィアスの場合は手続きをする必要があった。

今回の婚姻は王直々の命によるものであり、王女の身分を奪うために行われた降嫁である。

フレイヴィアスがまず国に届け出ると、次に国を通じて神殿に届けられる。

そうなれば婚姻は神に認められたものとなり、フェイアン国内だけでなく他国でもフレイヴィアスと王女が夫婦であることが認められ、王女は王女の身分を失う。

仮にイーデンの残党が残っていたとしても王女を蜂起の旗印に使うことはできなくなるのである。

手続きは本来であれば従者などに任せればいいが、相手が相手だけに手違いがあつてはいけない。

フレイヴィアス自ら必要な書類を提出すると、従者に手続きが終わるまで待機するよう命じ、一人その場所を離れた。

手続きには時間がかかるだろうし、何より登城した際は王の執務室に顔を出すよう事前に通達があつた。

中央宮の奥に所在する王の執務室へと歩いていると、前から見慣れた近衛の制服を纏う人影が見えた。

相手もフレイヴィアスに気付いたのだろう、一瞬足を止めた後、一路フレイヴィアスへと向かってくる。

そしてフレイヴィアスの近くまで来ると口を開いた。

「来ていたのか、フレイ。今は休暇中だろう？」

「ああ、手続きをしに」

短く答えると、フレイヴィアスは足を止めることなく進み続ける。

素っ気ない態度に彼は相変わらずだと苦笑しながら、方向を変えてフレイヴィアスの隣に並んだ。

その行動に面倒な人間に捕まった、と内心舌打ちする。

彼は自分よりも年上だが、同時期に近衛を拝命した者である。

人懐っこくお喋りで何かとフレイヴィアスに構ってくるが、時折、わざとかそうでないかはわからないが無神経な言葉を発してフレイヴィアスを苛立たせることがあるため、極力関わりたくはない。

今もその気のないフレイヴィアスのことなどお構い無しに話し始めた。

「……そういえば、今回の戦ではお手柄だったんだろう？ 民に紛れていた王太子に誰一人気付かなかったのに、フレイだけが見つけ出したそうじゃないか。さすが陛下の近衛は違うよな」

何がさすがなのかは分からないが、どこか皮肉のように聞こえてフレイヴィアスは内心眉をひそめながら、偶然だ、と短く返した。

彼から離れるため少し足を速めてみるが、彼も同じように足を速めてついてくる。

「けど偶然でもなんでも王太子を見つけたのを認められて、陛下から直々に褒美を賜ったらしいじゃないか」

もう伝わっているのか。

王の一人娘である王女付きの彼は今回の戦に赴いていない。

その彼がフレイヴィアスと王女の婚姻を知っていることに少し驚いた。

噂好きの人間の間では、やはりこういったことが広まるのは早いのか。

黙っているフレイヴィアスを気にする風もなく彼は好き放題言った。

「さっき言ってた手続きっていうのも、イーデンの王女との婚姻の関係だろ？ いいよなー、王女は物凄い美人らしいじゃないか」

確かに世間一般でいえば傾国の美女だろうが、整いすぎて精気のない人形のようなとフレイヴィアスは何度か思った。

「しかも16歳だろ？ だったらまだまだ自分好みに育てれるし……」

言いかけたが彼はすぐに自分の言葉を否定した。

いや、もう無理か、と。

最後の言葉にフレイヴィアスはぴくりと眉を動かさず、彼へと視線をやった。

視線をやった彼は、どこかにやにやとした下卑た笑いを浮かべていた。

自分と王女の婚姻の経緯が伝わっているのならば、彼が王女の境遇を既に知っていてもおかしくはない。

彼も当然知っているのだろう。

だからこそその言葉と意味ありげな笑み。

フレイヴィアスは何か我慢できない感情が沸き起こってくるのを感じた。

それでもフレイヴィアスは同僚であることや場所を考えて何も言わなかった。

さすがにそこまで無神経ではないだろうと。

しかしフレイヴィアスの考えもむなしく、次の言葉で不快は決定的になる。

「残念だったよな、せっかく迎えた妻が、父親と犯ってたお古の王女で」

その瞬間の感情をフレイヴィアスは何と言い表しているのかわからない。

彼にしてみれば他人事。

フレイヴィアスが何も言わないからこそ凶に乗ったのかもしれない。

いや彼からすればいつもの何気ない会話であって、他意はないのかもれない。

だからといって、

「口を慎め、ユリウス・リーメイ」

見過ごせるものでも許せる発言でもない。

突然の鋭い口調と眼差しに、彼はびっくりしたように目を見開いた。

「フレイ？」

鋭くなったフレイヴィアスの眼差しの意味が分からないと不思議そうだ。

そう、彼は本当に自分の発言の軽重を分かっているのだ。

それが分かっているにしてもフレイヴィアスは眼差しを和らげることはなかった。

この男は己の発言に責任を覚えることを知らなければならぬ。

「貴様に我が妻を語る権利など存在しなければ許しを与えた覚えもない。我が妻を侮辱するということは、グランティール家を侮辱するのと同じこと」

「いや、フレイ……その」

言い訳をしようとして口ごもる彼に耳を貸してやる気はない。

「グランティールを敵に回したくなければ、二度とそのような口をきかないことだ」

さすがにこの言葉の意味が分からないわけではないだろう。

彼は伯爵家の二男だが、グランティールに比べれば格下も格下、相手にもならない。

グランティールの力を持つてすれば、潰すことは容易い。

これはフレイヴィアスだけの見解ではなく誰もが認めることだ。それが分かっている彼も、一気に顔色をなくして引きつらせた。

「な、何怒ってるんだよ。本当のことを言っただけだろ、なのに…」

懲りずに繰り返し返そうとする彼に最早呆れる。

話して聞かせる価値もない。

失望を隠さない眼差しで一瞥したあと、

「忠告はした」

フレイヴィアはその場に彼を残して立ち去る。

彼はさすがに今度はついてくることはなかったが、フレイヴィアスの背中に

「フレイだつてイーデンの王女なんかもらつて迷惑してるんだろ？
なのになんで…」

呟いていたのが聞こえたが答える気はなかった。

迷惑してるんだろ？

確かにあの王女のことを持て余してはいる。

王の命によつて娶らなければならなくなった彼女を疎むほどではないが、どう扱つていいか困惑もしている。

今もグランティールに居るだろう王女のことを思うと、憂鬱にもなる。

だがそれでも、何も知らない男が己の妻となった彼女のことを悪しざまに言のを見過ごすことは、できなかつた。

グランティール家とフレイヴィアス自身の誇りにかけて。

だがそこまで考えて、フレイヴィアスは思うのだ。

何も知らないのは、フレイヴィアスも同じだ。

あの不快な気持ちも、さっきの言葉も結局は王女のことを思つてではなく、己のために発したものだ。

グランティールと己の誇りを守るために。

そのことに罪悪感とも自己嫌悪ともつかない感情を抱いたが、振り払つかのように先へと進んだ。

王の執務室を訪ねたフレイヴィアスは、少し外で待たされたが、すぐに中へと通された。

この時間帯を鑑みればかなり早いほうだと思ひながら足を進める。

広い室内には、大きな木製の机に腰掛ける王とその背後に立つ宰相、同僚の近衛の姿があった。

定められた挨拶を行うため片膝をつこうとしたが、王が必要ないと退けたためそのまま歩を進めて王の前で直立する。

王はフレイヴィアスにからかうように笑った。

「新婚生活はどうだ、フレイヴィアス？ リリーアが亡くなってからようやく迎えた夫人にグランティール家の者も喜んだんじゃないか？」

王の言葉にフレイヴィアスはどう答えてよいものか、一瞬戸惑った。

いえ、とも、はい、ともつかない言葉で曖昧に頷く。

だが王は端からフレイヴィアスの答えなど求めていなかったらしい。

重厚な机の上に広げられていた一枚の紙を拾い上げると、ひらひらと翳した。

薄ら透けて見えるその紙は、見覚えのあるものだった。

つい先ほどフレイヴィアスが提出した書類だ。

もう届けられていたのかと仕事の早さに舌を巻く。

「エリーザとの婚姻の手続きで、フィリーを提出したらしいない」

「はい」

そして聞かれるだろうと想っていたことを、やはり聞かれた。

フィリーとは、本来ならば女神の名を示すもので、この女神は女性、特に未婚の女性を守護する。

しかし婚姻に関するとき、フィリーは初夜の後の敷布を意味することとなる。

女性の破瓜の証、それが残る敷布をフィリーと呼ぶのである。

もちろん再婚や何か事情があるときは提出されることはないが、基本的には貴族同士の婚姻の際には提出されるべきものである。

フレイヴィアスもその部分だけ切り取らせたそれを手続きの書類

とともに提出していた。

王は翳していた書類を再び机の上へと戻すと、フレイヴィアスを見据えた。

「まあ、お前のことだ

偽りはないな？」

偽り、それが指す意味。

要するに証もないのに破瓜ではない血で染めた敷布を提出したのではないかということ。

フレイヴィアスは小さく息をついた後、王をまっすぐ見つめた。

「ありません。提出したフィリーは、真実エリーザ姫のものです」

きつぱりと言い切ったフレイヴィアスをしばし王は見つめていたが、ふと息をついた。

どこか瞳を陰らせ、小さく呟く。

「……………最後の良心か、それとも自身が使い物にならなかったか」

どちらでもよいが、と最後は吐き捨てるように言った。

誰に向けてのものか、考えるまでもない。

同じ王としてか、それとも娘を持つ親としての嫌悪か。

どちらにしても王はイーデンの王に対して並々ならぬ思いがあるようだった。

王はため息を一つついたあと、切り替えるかのように顔を上げてフレイヴィアスを見た。

「それより、エリーザの様子はどうか？ まあイーデンは特に戒律

を守る風潮があるからな、命を絶とうとすることはまずないだろうが目を離さぬほうが良い。よく見てやれ」

「はい。エリーザ姫から目を離さぬよう侍女には重々言い含めております」

フレイヴィアスの手本通りの応えに王は僅かに苦笑した。

その苦笑の意味がフレイヴィアスには分からなかったが、王の背後に立つ宰相も同僚もどこか微妙な顔つきをしていた。

「まあ、フレイヴィアスだからな……………」

よく意味の分からないことを呟き、王は一人納得したような顔を

する。

ますます訳が分からないフレイヴィアスだったが、王はそれ以上は何も言わなかった。

その後いくつか話しをしたが、多忙な王の時間を拘束することは許されない。

すぐに王への退出の挨拶を済ませ、扉へと向かった。

その背を見ていた王がふと声をかけた。

「なあ、フレイヴィアス」

足を止め、振り返る。

王は机に両肘をつき、どこか遠くを見るような目でフレイヴィアスを見ていた。

「もうすぐ5年がたつな……時がたつのは本当に早いものだな」

独り言のようなそれを呟く王は、遠い過去を思い出しているのだろうか。

フレイヴィアスは沈黙したまま王の言葉に耳を傾けた。

「時の流れを早く感じるようになったのは年を取った証拠か……だが年を取ったからこそ見える物もある」

「……陛下」

「年よりの戯言だとも思え、フレイヴィアス」

まだ50にも届かないというのに王は自分のことを卑下したあと、フレイヴィアスを見つめた。

「人はそう簡単には変わらない。だが時だけは人を変える力を持っている」

それを忘れるな、と王は小さく呟くように告げた後、手を振った。抽象的な言葉にフレイヴィアスは戸惑いを隠せなかったが、退出を促された以上残ることはできない。

仕方なく一礼して今度こそ執務室を後にしたのだった。

帰りに婚姻の手続きが完了したことを確認した後、フレイヴィアスは真つ直ぐグランティールへと帰宅した。

出迎えた執事に上着を渡し、私室で一息ついた後、ふと尋ねた。

「エリーザ姫は……いや、エリーザは私室か？」

正式に妻となった王女の所在を尋ねると、執事は中庭だと答えた。「中庭？」

「はい。もう1時間ほどたつかと思えます」

一体何をしているのか、フレイヴィアスは不思議に思いながら私室の窓から花々が咲き誇る中庭へと視線を落とした。

すぐに探し人の姿は見つかったが、一体何をしているのか身動き一つせず立ち尽くしたままだ。

日が落ち始め、気温が下がる前に中へ入れたほうがいいだろう。自身も中庭へと降りると、真つ直ぐに王女のもとへと向かった。

王女は特に満開に咲き誇る花の前でじつと立ち尽くしているが、後ろから見てもその花を愛でているような素振りはなかった。

離れた場所に侍女が控えているのを確認しながら、フレイヴィアスは王女の背後で立ち止まった。

土を踏む音で気付いたのだろう、王女が振り返る。

ふわり、と長い金糸と白いドレスの裾がやわらかく風に揺れた。

フレイヴィアスの姿を認めてわずかに緑の瞳を見開いたあと、

「お帰りなさいませ」

小さく呟いた。

それに頷きを返すと、フレイヴィアスはじつと見上げる緑の瞳を見返しながら、ゆっくりと口を開いた。

「今日、手続きを終えました」

「……手続き、ですか」

ぱちぱちと瞬きながら、僅かに首が傾げる。

フレイヴィアスは、殊更ゆっくりと告げた。

「ええ。これであなただけは私の妻と認められ、イーデン王女の身分を失いました」

「……………」
フレイヴィアスの言葉に緑の瞳が大きく見開かれ、次いで戸惑うように揺れる。

視界の端で手が震えているのが見えた。

そんな王女に追い打ちをかけるようにフレイヴィアスは、淡々と告げる。

「もう、あなたにはここ以外に戻る場所はない。二度とイーデンの土地を踏むことはないでしょう」

フレイヴィアスの残酷な言葉に唇を震わせたあと、とつとつ緑の瞳をぎゅゅとつむり、王女は震える両のてのひらを合わせた。

風が吹けば倒れてしまいそうな華奢な身体を、哀れだと思う。

だが同時に仕方ないことだとも思う。

青ざめ、震える身体に近づくと、フレイヴィアスは持ってきていた王女の上着を肩からかけてやりながら小さく呟いた。

どうぞ恨んでください。

身分を、故郷を、何もかも奪った男を恨めばいい、憎めばいい。それでこの小さな体の調和が保てるならばそれでいい。

フレイヴィアスは、そう思った。

けれど祈りを捧げるかのように手を握り合わせていた王女は、小さく首を振る。

その拍子にぼたり、と白い頬を伝う透明なしずくが落ちた。ぱたぱたと地面に落ちるそれをしばらく無言で眺めていたが。

「……………」
そつと哀れな肩を冷たい風から守るように抱き寄せた。

王女は、逆らうことなく、何も言わずにフレイヴィアスの腕の中

に留まったのだった。

今日この日
王女は名実ともにフレイヴィアスの妻となっ
た。

神殿

記憶の中にある母は、好奇心旺盛で何事にも積極的に動く人だった。

一つのところに留まらず、部屋で縫物をしていたかと思えば庭に下りて花を摘んだり、茶会を開いたり。

いつも朗らかで笑顔を絶やさない人だった。

あと1時間ほどで日付が変わろうという時間に王城から帰宅したフレイヴィアスは、湯を使って体の汚れを落とすと、妻の私室を訪ねた。

イーデンとの戦が終結し、妻がフレイヴィアスのもとに降嫁してから半月あまりがたつ。

未だ妻をどう扱ってよいかは分からないが、外聞や妻の立場を考えるとあまり放っておくわけにはいかない。

近衛の仕事を終え、グランティール家に帰宅する時間は不規則で、深夜近くになることが多い。

妻には遅くなるため自分を待たず先に寝室で休むよう伝えていたが、この半月の間それは一度も守られたことはなかった。

彼女の中ではフレイヴィアスは仕えるべき相手として定められているらしく、その主人よりも先に休むという考えはないようだった。

フレイヴィアスとしては先に休んでくれたほうが何かと楽なのだが、強く言うことはできない。

必然的に就寝前に妻の私室を訪ねてから寝室に行くことが日課となっていた。

今日も妻の私室に向かうと、フレイヴィアスは軽くドアをノック

し、しばし応え待ったが、返事がない。

これもいつものことである。

妻はどうやら何か一つのこと集中し始めると他のことが疎かになる癖があるようだった。

最初はフレイヴィアスの顔を見たくないため無視しているのかも考えたが、妻につけた侍女から聞いてこの癖に気付いた。

無作法なことではあるが、妻からの応えがなくともフレイヴィアスは勝手に私室に入ることに決めた。

この日も応えがなのままドアを開けると、室内へと足を踏み入れた。

「エリーザ」

未だ呼び捨てすることには慣れないがこれも妻が譲らない。

呼び掛けた妻は室内の長椅子に腰をかけて本を読んでいた。

手元にある本はもともこの部屋でフレイヴィアスの母が所有していた本だ。

何をすればいいのでしょうか。

この屋敷にきた初日にそう呟いた妻は、この半月ほどは一日の大半を私室で本を読んだり縫い物をして過ごしているようだった。

「お帰りに気づきかず、申し訳ございません」

すぐに膝の上の本を置いて立ち上がり、頭を下げた。

フレイヴィアスは、構いません、と言いなから妻のそば近くまで歩む。

顔を上げた妻の顔色が朝と変わりないことを確認すると、

「何か不自由はありませんか」

いつもと同じ言葉をかけた。

それに対する答えはこれもいつも同じで、

「ございません」

というものだった。

いつもなら頷き、すぐに寝室へと誘うが今日は違った。

「明日は一日休暇をいただきました」

もともとは3日後の予定だったが、同僚の都合で明日へと変わった。

「そこで明日は午後から神殿に行こうと思います」

「神殿に……？」

「ええ。婚姻が神殿でも認められましたので、一度は訪ねて祝福を受けていたほうがいいでしょう」

古い習わしだが、国を通じて神殿に婚姻が届けられてから1週間から1か月の間に夫婦で祝福を受ければ未永く夫婦生活が続くと言われている。

妻は、フレイヴィアスの言葉に軽く目を瞬かせたあと、突然の言葉を疑わずこくりと頷いた。

「分かりました」

それでもどうして急に、とは思っているだろう。

フレイヴィアス自身、唐突に休暇が明日へ変わったとき、何をしようかと戸惑った。

自宅でゆっくりするのもいいだろうが、それにしても妻の存在を無視することはできない。

ならばいつそのこと外に連れ出したほうがいいのでは、と考えたときに思いついたのは神殿だった。

「明日はそのつもりでいてください」

「……はい」

妻が了承したのを確認すると、フレイヴィアスは今度こそ妻の手を引いて寝室へと誘ったのだった。

翌日、早めに昼食を取ったあと、馬車で王都の南にある神殿へと向かった。

神殿の門扉近くに馬車を付けさせると、妻を伴い内部へと進んだ。

この日、妻は、淡い金色で刺繍が施されたドレスを身に纏い、頭には揃いのベールを被っていた。

ベールは、高貴な女性が外出する際に被ることは珍しくもないし、妻の立場を考えると被せていたほうが何かと都合がいい。

妻自身、ベールを被るよう申し向けると、異論なく頷いた。

ベールを被った妻を連れて神殿の内部にある祭壇が設けられた祝福の間へと足を進めた。

事前に申し込みをしていたお陰で、祝福の間の前で待つことなくすぐに室内に通される。

さすがに儀式の最中にベールを被せておくわけにはいかないため、ここで脱がせて連れてきていた侍女に渡す。

儀式を司る神官が説明した手順通りに夫婦で花と水を捧げ、祝詞を受けた。

厳かな雰囲気と軽い緊張もあつてあつという間に感じられたが、実際は1時間ぐらいかかっただろうか。

これで終わります、と告げた神官に感謝の意を述べて、祝福の間をあとにする。

肩を並べて歩き出した方向は、来たときとは異なるものだった。

そのことに妻は気付いているのだろうが、迷いなく進むフレイヴィアスに何かこの神殿にまだ別の用があると察したらしい。

しばらくは黙ってフレイヴィアスについてきていたが、広い神殿を迷いなく進む姿を見て疑問に思ったようだった。

「……フレイヴィアスさまは、よく来られるのですか」

その問いかけにフレイヴィアス軽く首を振った。

「いいえ、3年前に父を亡くして以来訪れていません。ですが叔父がここで神官を務めていますのでよく知っています」

「……そう、ですか」

叔父、という言葉に驚いたようだ。

祖父母と父母が既に亡くなったことは話したが、叔父がいることを口にしたことはなかったので、存在自体知らなかったに違いない。

叔父は早くから俗世を離れた人だとも説明しながら先へと進む。

昼下がりの神殿は、朝夕に比べればほとんど人がいない静かなも

のだ。

二人分の足音だけが響く中、進むうちに神殿の壁や天井に描かれた絵からふと気付いたのだろう。

沈黙していた妻が思わずというようにぼつりと呟いた。

「ここは、インセラス神殿なのですね……」

妻が名を知っていたことに内心驚きながらも、フレイヴィアスはその呟きを肯定した。

インセラス神殿は、フェイアンにある神殿の中でも特に他国が信仰する様々な神を奉っていることで有名である。

それゆえ他国から移住してきた者たちなどの多くがこの神殿を訪れた。

フレイヴィアスは、いくつもの部屋の前を通りすぎたが、足をあてる部屋の前で止めた。

妻もそれに倣い足を止め、目の前の部屋の扉に描かれた絵をぼんやりと見上げた。

「ここがイリーラ神を奉った部屋です」

「……………」

イリーラは、知恵を司る神である。

そして　イーデンが主神と定めて信仰していた女神だった。

フレイヴィアスは黙したまま扉を見つめる妻を見下ろした。

妻は、一日の大半を私室で過ごしていると報告を受けていた。

だが一日のうち必ず一度は中庭へと降りるとも報告を受けていた。その時間帯はいつも決まっているわけではない。

だが、一度中庭に降りると長くて2時間近くも同じ場所に立ち続けているという。

必ず同じ方向を向いて。

侍女たちは何も思わなかったようだが、フレイヴィアスは妻が向くという方向を聞いてすぐに分かった。

妻が見つめる先にあるのは　イーデンだ。

いや、かつてのイーデンがあつた場所。

彼女が二度と踏めない故郷。

憂いているのか、恋しがつているのか、それとも命を奪われた父や兄、国の者の冥福を祈っているのか。

フレイヴィアスには分らない。

それでも妻がいつも同じ方向を見ていると聞いたとき、この神殿に連れてくることを思いついた。

妻が望んだわけではない。

要はフレイヴィアスの自己満足だ。

「私はこのあと叔父と会う約束をしています」

「……フレイヴィアスさま、」

「ここで過ごしても構いませんし、一緒に来てくださっても構いません。あなたが決めてください　庭に先に行っています」

そう言つと、困惑する妻を残してフレイヴィアスは部屋の前から離れた。

言つたとおり選ぶのは、妻だ。

どちらを選んでもフレイヴィアスは咎めるつもりは更々ない。

廊下を抜けると、神殿の奥庭に出た。

奥庭では、神に捧げられる神聖な花が植えられており、花々は今が満開だった。

叔父との約束までもう少し時間があつたが、少しして一人の神官が現れた。

曰く、「突然儀式を行わなければなくなつた」と。

恐らくは誰かが亡くなつたか。

3年ぶりのことではあつたが、仕方がない。

謝罪する神官に許しを与え、神官が立ち去つたあと庭に設置された長椅子に腰かけた。

妻が現れる気配はなかった。

部屋に入ったのかもしいしもしかしたらまだ悩んでいるのかもしれない。

あまり信仰に重きを置かないフェイアン人であるフレイヴィアスには、妻の葛藤は理解できない。

だがその人によって価値は違うのは当然であるし、尊重しなければならぬとも考えている。

だからこそ迷い、考えた末に妻が部屋に入らなくてもそれは彼女の答えだと思っし、それに対してどうこう言っつもりもない。

フレイヴィアスは、ただこの庭で待つだけだ。

長椅子に腰を掛けたままゆっくりと息を吐くと、フレイヴィアスは目を閉じた。

どれぐらい時間がたったか。

土を踏む小さな音に閉じていた目を開ける。

「……………」

鋭く視線を走らせた先に見つけた姿に、フレイヴィアスは警戒を解いた。

気怠さを振り払うように軽く頭を振った後、腰掛けていた長椅子から立ち上がり、庭の入口で立ち尽くす妻へと静かに歩み寄った。

見つめた先、妻はぼんやりと庭の花々を眺めているようだった。

グランティールの中庭でもいつもああしているのだろうと思いつながら、彼女の隣に立つ。

妻は隣に立つフレイヴィアスに気付いているだろうが、何も言わないし視線も前を向いたままだった。

しばらく庭に遊びにきた鳥の鳴き声に耳を傾けていたが、突風が一つ吹くとそろそろ妻を連れて帰宅しようかと考えた。

風に散らされた色とりどりの花が舞い上がる。

花を見ていたフレイヴィアスは、始め空耳かと思った。

私は。

小さな小さな声だった。

隣に立つ妻へと顔を向けると、白い小さな顔は相変わらず庭へと

向けられていたが、その緑の瞳は伏せられていた。

「……………入ることが、できませんでした」

小さな小さな声で呟かれたそれは、苦しみと悲しみに満ちていた。ずっと悩み、考え、そしてあの部屋の前で立っていたのか。

妻はそうして、あの部屋に入ることができなかつたらしい。

なぜ入らなかつたのか、視線で問う。

「私にはあの部屋の中に入る……………いえ、イリーラさまの前に立つ資格がありません」

「……………それは、あなたが王女の身分を失ったからですか」

フレイヴィアスの静かな問いかけに、妻は頑是なく頭を振った。

「いいえ……………イリーラさまから民を守るために王位を授けられた王族の末裔でありながら、王女という身分を与えられながら、誰一人救わなかつたからです」

「ですがそれは、」

妻だけの所為ではない。

いや、むしろイーデンの王によって監禁されていた彼女には何の罪もないのではないか。

だが彼女はそうは考えないらしい。

「それなのに……………私は生き残ってしまいました。私だけが何の罰も受けずにこのうと生きています」

フレイヴィアスの言葉に耳を傾けず、自分を責め続ける。

その声はか細く、苦しみしかなかった。

「自ら命を絶つこともできない私がどうしてイリーラさまの前に立つことができましょうか」

「エリーザ……………」

フレイヴィアスの呼びかけにも妻は答えない。

青ざめた顔に己の白い手を当てる。

その手の間から僅かに覗く唇が、震えていた。

嘆きは止まらない。

「民ではなく私こそが死ぬべきだったのに……どうして私は生き残ってしまったの」

ぼつりと誰に言うでもなく。

子供が途方に暮れたように呟かれたそれは、初めて聞く妻の想いだった。

フレイヴィアスに降嫁してからの妻は日々を淡々と、まるで人形のように生きていて。

笑うことも怒ることもしない、ましてや心の中を見せることなどしない人だった。

政略結婚であり、フレイヴィアスもまた自身のことを妻に語らないのだから、それも当然だと思っていた。

けれどこれほどの苦しみを抱えているとは、思わなかった。己の家族を、国を滅ぼした男を憎悪しているだろうとは思っていた。

だがそれよりも妻は生き残った自分こそを憎み、苦しんでいたのだ。

本当にどこまでも誇り高く、王女という身分に相応しい少女だった。

フレイヴィアスは感嘆するとともに、自分を責める彼女の姿にかつてのことを思い出す。

『ごめんなさい、ごめんなさい私が死ねばよかったのに……っ』

あの人も自分を責めて泣きじゃくった。

あのときフレイヴィアスは、どう言葉をかけていいかわからなくて。

考えた末に、ただ「あなたが悪いわけではありません」としか言

えなかった。

あの言葉など何の救いにもならなかったに違いない。

あれからもう何年もたつというのに、未だにフレイヴィアスは自分を責める人を前にしてどう言葉をかければいいのか分からなかった。

それでも、自分を責める彼女を放っておくことはできなかった。

己の顔を覆う妻の手をそっと掴むと、ゆっくりと下に降ろさせる。その仕草にようやく妻がのろのろと顔を上げてフレイヴィアスを見る。

大きな緑の瞳は暗く、苦悩の色が濃い。

その瞳を見下ろしながら、フレイヴィアスはゆっくりと口を開いて拙いながらも言葉を綴った。

「……私は、今回の戦で多くの人間の命を奪いました。ご存じのとおり、あなたの兄であった王太子の命も」

「……………」

「もちろん、あなたの命も奪うつもりでいました」

フレイヴィアスは、王の騎士だ。

王に従い、王のために生きる者。

フェイアンに仇をなしたイーデンを放っておくことはできない。

王族は皆処分するつもりでいた。

「あの日、王の命があれば私はためらうことなくあなたの命を奪っていたでしょう」

それを当然のこととして考え、実行していただろう。

だがどういう運命なのか。

「そうはならず、あなたは私に降嫁してくださいました……もしも今、あなたの命が誰かに奪われようとするならば私はあなたを守り、あなたが自ら命を絶たんとすれば、必ず阻止するでしょう」

握った妻の腕に力を込める。

細く華奢で、もう少して折れてしまいそうだ。

心はどこまでも誇り高くとも、身体はまだ16歳の少女だった。

既に妻とし、幾度か抱いたこの身体はまだまだ幼い。
戸惑いに揺れる大きな緑の瞳を強く見つめた。
それからフレイヴィアスは考え抜いた末にこの言葉を言い放った。

「生きてください」

短く、端的な言葉。

だがこの言葉しかないと思った。

フレイヴィアスの言葉に妻は目を大きく見開いた。

「王女としての生が認められないのならそれでも構わない、あなたはもうイーデンの王女ではないのですから」

「……っ」

「これから生きる理由は、私を憎むためでも恨むためでもなんでもいい」

妻は信じられないものを見るかのようにフレイヴィアスを見ている。

フレイヴィアス自身、これが正しいのかは分からないし、自分でもおかしいことを言っている自覚はある。

それでも構わなかった。

彼女がそれで自分を責めるのをやめるのなら

「王女としてではなく、私の妻として生きてください」

はつきりと言い切ったその言葉を妻がどう受け止めたのかは分からない。

愚かなことをと反発するかもしれない。

こんな言葉など何の救いにもならないかもしれない。

けれど妻は長い金の睫毛と唇を震わせたかと思うと、あの婚姻が成立した日と同じようにぎゅっと目を閉じた。

あの日と同じ、大粒の涙がまた白い頬を伝う。

ぼたりぼたりと落ちるそれは、清らかで美しい。
しばし見惚れたあと、思わずフレイヴィアスは呟いた。

「……あなたは、泣いてばかりだ」

泣かせるフレイヴィアスが悪いのか。

彼女の涙の意味は、いつも分からない。

何も語らない。

だがそれでもいい。

フレイヴィアスも、何も聞かない。

ただあの日と同じように腕を伸ばして、華奢な身体を囲う。

細い体は、やはりフレイヴィアスの腕の中に簡単に収まった。

けれどあの日と違うのは。

困った妻の身体が、フレイヴィアスへと寄り添ったことだ。

僅かな変化ではあったが、その確かな変化、それをフレイヴィア

スは感じた。

妻が変わるのであれば。

これから、自分も変わっていくのだろうかと思いつつ、彼女が
落ち着くまで抱き続けた。

祈り

祈りはいつだって届かない。

あの薄暗い部屋で何度も救いを求めて祈ったところで、何も変わらなかった。

だから私はもう祈らない。

神を信じきれず、祈ることをやめた自分は、もう御前に立つ資格なんてない。

季節が冬へと変わったころから体調を崩していた母が亡くなったのは、11歳を迎えたばかりのことだった。

そのときの父の嘆きは、見ていて哀れに思うほどだった。

お父様は、弱い人だから。

ふと何かの折りに困ったように母が呟いた言葉を思い出した。

母の死を受け入れることができないで、父は眠れない日が続いているようだった。

そうしていつしか辛い母の死から逃げるようにお酒に手を出してお酒が入れば一時でも忘れることができるからお酒に溺れるようになった。

それと同じころだっただろうか。

父は私を傍から離さなくなった。

何をするにも私を傍に置き、少し離れただけで落ち着きなく探し始めるという。

母が亡くなって寂しいのだろう。

私自身も母を亡くして寂しく思っていたし、私が傍にいて父の寂しさが紛れるのならとできるだけ寄り添った。

けれどいつからだろうか。

父の私を見る目が変わっていることに気づく。

父は私を通して 母を見ていた。

母が亡くなってから1年、12になった私は、日に日に母に似てきていた。

波打つ金の髪も緑の瞳も全て母から受け継いだ私を見て父が時折何とも言えない表情をしていたのをしばらくは気づかないふりをしていた。

父は再婚を、と望む声を全て退け、相変わらず私を傍に置いた。共にいる時間が少しずつ延び、離れている時間が短いほどだった。気がついたときは父と同じ部屋で寝起きすることが当たり前になっていて。

周囲が慌て二人を引き離そうと躍起になればなるほど父は頑なになった。

いつ頃からか兄は、そんな父を、私を蔑んだ目で見ていた。

『ローザ、ローザ』

それは突然始まった。

大粒の涙を流しながら裸の私の身体に触れるのは 誰。
あらゆる場所に触れ、肌の至るところに唇が這う。

父の姿をしたこの男は誰なの。

父はとうとう周囲の言葉を全て無視して、私を己の私室のさらに奥へと隠した。

足には鎖を嵌めて。

日もほとんど差さないその部屋で私は3年の歳月を過ごすことになる。

唯一私の世話をするのは初老の女だった。

彼女は私を哀れみ、時折外の話をしてくれた。

話を聞いて、周囲が既に父を見放していることを知る。

『ローザ、ローザ』

そして相変わらず父は私を母の名で呼ぶ。

もつどれくらい前から父に私の名前を呼ばれていないだろうか。

唯一部屋にある寝台に仰向けになつたままぼんやりと考える。

嵐のような時間をいつも思考を飛ばして過ごす。

己が満足すると、父の姿をした男は胸に顔を埋めて寝息を立て始める。

最初は哀れに思ったこの人を憎んでいるか、それとも哀れんでいるか。

今となつてはもうどうでもよかった。

寝台に寝転んだまま、部屋に一つだけある窓を見上げる。

あの窓からは太陽の光しか差さない。

『月が見たい』

長い間見ていないそれを渴望した。

ある日、世話をする老女が血相を変えてやってきた。

戦が始まつたと。

相手は長く同盟を組んでいた隣国でこちらから仕掛けたと。

幼いころ母に連れられて訪ねたこともあるあの豊かな国に。

外を知らない私でもなぜそんな無謀なことをと思った。

予想通り日に日に戦況は悪くなっているようだった。

老女が部屋に来る回数が減り、同時に父と過ごす時間が短くなつたところ。

ある日、本当に久しぶりに1日を一人で過ごした。

次に扉を開けたのは、父でも老女でもなかった。

そこに立っていたのは、異国の王だった。

それだけで悟る。

負けたのだと。

「ああ、間違いない……エリーザ姫だ」

幼いころ母に連れられ会ったこの王を王の名に相応しい人だと思
い、憧れた。

この王の前で最後を迎えることができるのはある種幸せなことな
のかもしれない。

ならば誇り高くあろう、最後の 王女として。

首を差し出す覚悟は疾うにできていた。

けれど結果は王の情けで生き残ることになった。

代わりに、

『褒美をとらせる』

命じられたのは降嫁だった。

相手は、年若い騎士。

静かに佇んでいた人は、癖のない長い銀髪と紫色の瞳が美しい、

王の忠実な騎士だった。

王命に従い、何の役にも立たない滅んだ国の王女を迎えてくれた。

飾りの妻となるだろうという予想を裏切り、公爵は私をきちんと
妻にしてくれた。

こんな身体など見たくも触れたくもないはず。

けれど触れられた手は、終始丁寧で穏やかなものだった。

淡淡とした表情の公爵が内心はどう思っているかはわからないけ
れど、きつと良い感情など抱いていないはず。

それでもその不平不満を私にぶつけることなく、いつも気遣って
くれた。

だが公爵は、私が公爵を憎んでいると思っている。

国の者を、兄を手にかけて自分を恨んでいると。

確かに国の者を失ったのは悲しく苦しい。

命を落とした兄を哀れに思う。

だが、戦を仕掛けたのはこちらからである。

兄のことは自業自得といえる。

公爵は公爵の大事なものを守るために戦っただけ。

何もしなかった私にどうして公爵を憎む資格があるだろうか。

のうのうと生き残ってしまった私に責める権利なんてない。

公爵こそ私の存在など気にかける必要などないのに。

なのに。

王女としてではなく、私の妻として生きてください。

残酷で優しい言葉をくれた。

あとからあとから涙が、こぼれた。

公爵に降嫁して王女の身分は失った。

今まで培った王女としての誇りも何もかも。

けれど公爵の妻として、『生きること』を許された。

自分すら認めることができなかつた生を認めてくれた。

それだけでもういいと思えた。

この先、私が公爵の妻として共に居られる時間は短いかもしれない。
いつか生き残ったことを断罪される日がくるかもしれない。
それでもこの瞬間、公爵の妻となれたことを嬉しく、そして
誇りに思う。

『フレイヴィアさま』

あなたが私を妻にしてくれた。

あなただけが私に救いを与えてくれた。

私を映すその紫の瞳が、心が私を見ていなくても。

変わらずあの人を想っているのだとしても。

私は、今この瞬間幸せです。

王女

叶わないものだ、最初から諦めていた。

ならばせめて小さな蕾が満開の花へと開く様をこの目で見られるのなら、それだけでいい。

そう思っていた。

その日は、王城の2階、大広間で盛大な祝宴が催された。

約1か月前に他国へと赴いていた王の娘たる王女が帰国したからだ。

今回初めて使節団の正使を務めた王女は、見事役目を果たしたという。

出席を許された者たちはさすがは名君たる王の娘だと惜しみない称賛を王女へと送った。

同時に18歳になる王女も年頃だ、そろそろ結婚をと望む声も少なくなかった。

祝宴の間に己の顔を売ろうと若い独身の貴族たちは王女の近くへと侍ったが、今日は誰一人として王女の心を射止めた者はいなかったようだ。

時が過ぎ、深夜近くともなれば少しずつ帰宅の様相を見せ始めていた。

フレイヴィアスは、祝宴が終わりかけた時間、大広間から離れて後宮近くの庭を歩いていた。

当然グランティール公爵として今回の祝宴の招待を受けていたが、それよりも近衛としての仕事を選び、王の警護に当たった。

その王も既に王妃とともに祝宴の席から外れ、後宮へと入った。

以後は通常通り近衛として周囲の警戒に当たっていた。

異常がないことを確認し、庭園から離れようとしたフレイヴィアスの耳が小さな足音を拾った。

足を止め、警戒しながら音の方向へと振り返ると、ゆっくりとした足取りで現れたのは一人の若い女性だった。

「フレイヴィアス」

小さく呼び掛けられ、微かに目を見開く。

月明かりの下でもはつきりと分かる、燃えるような赤い髪と瞳。

彼女は　　この国唯一の王女だった。

今回の祝宴の主役であるはずの彼女がなぜここに居るのか。

疑問に思うよりも何よりもまず長年の習慣で片膝をつこうとしたが、やめて、という王女の制止で動きを止めた。

「膝などつかないで」

必要ない、とどこかきつい言葉に戸惑ったが、引かない様子に諦めてフレイヴィアスは軽く頭を下げるだけに留めた。

同時に周囲に視線を走らせ、王女が共として連れてきているのが王女と同じ年の乳兄弟でもある侍女だけだと知る。

王女付きの近衛の姿が近くにはない。

真っ直ぐに顔を上げ、傍近くへと近寄ってくる王女を今度はフレイヴィアスが制止した。

「殿下、すぐに大広間へ……いえ、後宮内へとお入りください。ここは警護が手薄です」

御身に何かあればとフレイヴィアスは近衛を一人も連れていない王女の身を案じる。

しかし、王女はフレイヴィアスのその言葉に機嫌を損ねたらしい。歩みを止めず、フレイヴィアスの目の前まで来て立ち止まると、きりきりと眉を吊り上げ、大きな赤い瞳でフレイヴィアスを睨み付ける。

「他に言うことはないの？」

紅が刷かれた唇から洩れる声も当然ながら鋭い。

王女の態度に困惑するフレイヴィアスが、口を開こうとすると遮るように王女は言葉を紡いだ。

自分よりもずっと高いところにあるフレイヴィアスの顔を見上げ、

「あなたに分かるかしら？ あなたが結婚したと聞かされたときの私の気持ちだ」

絞り出すような声で言い放つ。

ぎゅっと身体の横で握られた手は怒りのためか震えているようだ。つた。

瞬きをほとんどしない赤い瞳はフレイヴィアスから決して逸らされない。

「王女としての役目だからと国を1か月も空けて、ようやく帰ってきてみればあなたはイーデンの王女と結婚したというじゃない。最初は耳を疑ったわ、あなたに限ってと……けれど冗談だと思っていたそれが本当で、なのにあなたは私のところに言い訳をしに顔を出すどころか今日の祝宴にも顔を出さなかったわ！」

激しくフレイヴィアスを責めるうちに感情が高ぶってきたのだらう。

王女は赤い瞳に薄らと涙を浮かべていた。

白い頬は怒りのために紅潮し、唇が微かに震えていた。

フレイヴィアスはかつてないほどの怒りを露にする王女に困惑と

微かな優越感を感じずにはいられなかった。

だがすぐにそんな感情を抱く自分を嫌悪し、自制する。

まずはどうにかして王女を落ち着かせなければ、と口を開いた。

「落ち着いてください、レイナ姫。ここでは誰が聞いているかも分かりません」

いくら人気がないとはいえ、王女の声聞いて誰かやってくるかもしれない。

こんなところを見られれば、王女の不名誉となることは疑いようもない。

それだけは避けねばならないだろう。

しかし静かになだめるような声も効果はない。

「誰に聞かれようとどんな噂が立とうと構わないわ！」

「殿下」

フレイヴィアスの呼びかけを無視し、王女はきつと赤い瞳でフレイヴィアスを睨み上げた。

その拍子に瞳からとうとう涙が一粒だけこぼれる。

白い頬を伝う涙の美しさに思わず見惚れる。

言葉を失ったフレイヴィアスを相変わらず強い眼差しで見つめたまま、はつきりと言い切った。

「私はそれぐらいあなたのことが好きなのに」

迷いない言葉にフレイヴィアスは息を呑んだ。

それは紛れもない、一国の王女の愛の告白だった。

誰が聞いているかもわからない場所での言葉。

だが王女はあくまでも強くフレイヴィアスを見据え、己の言葉を後悔する様子など微塵もない。

清々しいまでに王女は真つ直ぐだった。

制止のためだったのか、それとも 受け入れるためか。

思わず王女へと手を伸ばしかけ、けれどはつと我に返って引つ込めようとした手をそれよりも先に王女が掴んだ。

「フレイヴィアス」

剣を持つ者特有の武骨な手に、小さくて白い滑らかな手が重なる。幼い頃ならばまだ許されたそれは、成人した今では決して許されない。

ましてやフレイヴィアスは既に妻がある身だ。

こんなところを見られれば自分はもちろん王女にも悪い噂が立ち、適齢期である王女の縁談にも影響が出る。

すぐにでも離さなければならぬと分かっているのに、ぎゅっと

握られた手は無下にふり払うには華奢すぎた。

「私は、あなたが好き」

フレイヴィアスの葛藤など気にもかけないで、王女は再び言葉を重ねた。

子どものころから変わらない嘘偽りない真つ直ぐな言葉だった。

父もまた王の近衛を務めたフレイヴィアスは、幼い頃から王宮に上がることが少なくはなかった。

王女と初めて会ったのもこの王宮で、フレイヴィアス自身は幼すぎてそのときのことをよく覚えていない。

けれど王宮に上がるたびに遊び相手を務めた小さな王女は、どこまでも無邪気で可愛らしかった。

王と王妃、兄である王太子に甘やかされたためか、少しわがままなところはあったが、それすらも笑って許せた。

無邪気に3歳年上のフレイヴィアスに纏わりつき、慕ってくる王女はかけがえのない存在だった。

幼い感情がいつしか大人のそれと変わらないものへと変わったのはいつだったか。

最早よく覚えてはいない。

気が付けば彼女のことを何よりも大切になっていたのだ。

だが王女よりも3歳年上であるフレイヴィアスは、王女に対する想いがどういったものか自覚したときには、それを口にできる身分ではないと悟る分別がすでにあつた。

自然と王女から身を引くことを決意し、苦しさを押し殺して距離を置き始める。

けれどそれに気付いた王女が許さず、再び距離を詰めた。

それを幾度か繰り返し返したとき、皮肉にもフレイヴィアスの母の死が決定的となり、二人を隔てた。

フレイヴィアスは以降完全に王女から距離を置き、王女もまたフ

レイヴィアスを構うことを止めた。

それを寂しく思うのは傲慢だと己に言い聞かせ、決して自分から王女へと近づくことはなかった。

もう傍らにあることはできないが、それでも王女が光の当たる場所ので幸せに笑ってくれればいいと願う。

自分のような者が懸想しているなどと噂が立てば、王女にとって不名誉にしかならないだろう。

そう考えて遠くから眺めることもやめ、完全に己の気持ちを隠した。

それから年を経て大人になった王女は、大輪の花が咲くかのようによますます美しくなり、諸国からの求婚が絶えないという。

だがそのどれも王女が難色を示しているとは聞いていた。

その理由が、

「子供のころからずっと、あなたの花嫁になることを夢見てきたの。私はあなたの傍にいたい」

自分にあるなどと。

考えたことはなかった、といえば

やはり嘘になるだろう。

公の場で顔を合わせるたびに王の近衛として仕えるレイヴィアスへと向けられる、王女の視線に気づかないことはなかった。

焦がれるような熱を含んだ、強い眼差し。

だがそれを敢えて無視し、貫いてきたのは何のためか。

手を取ってはいけないと強く課したのは、なぜか。

レイヴィアスは王女の視線から逸らすように、一度目を伏せた。

ずっと成長を見守り、愛した少女からの告白。

焦がれ、欲して已まなかった存在が今、目の前でレイヴィアスへと差し出されようとしている。

手に入れることは叶わないと、諦めた恋が目の前にある。

「レイヴィアス？」

手を伸ばし、受け止めることができればどれだけよかっただろうか。

けれど 一時の感情で受け入れてしまうほど最早フレイヴィアスは幼くも、分別もないわけではなかった。

この手を取ることがどれほど王女のためにならないか、よく分かっている。

公爵の地位にあるとはいえフレイヴィアスには王女を娶れるほどの力はないし、祖父が当時の王女を娶ったときと違い、王女を国内の貴族に嫁がせても利益がない。

それに何よりも フレイヴィアスには既に妻がいる。

国を失い、自分へと降嫁した妻の姿がふつと脳裏に浮かんだ。

それだけでフレイヴィアスは、知らず知らずのうちに動揺していた自分の気持ちがあつと落ち着いていくのを感じた。

伏せていた目を上げると、そつと己の手を握る王女の手をもう一方の手で外した。

フレイヴィアスの仕草に傷ついた色を浮かべる王女が口を開く前にフレイヴィアスは跪き、頭を垂れた。

「レイナ姫。傍に、とおっしゃっていただけるとは身に余る光栄ではありませんが、お許しください……私には既に妻がおります。ただ一人妻を愛すると神に立てた誓いを違えることはできません」

臣として深々と頭を下げる。

その態度に王女は信じられないとばかりに大きく目を見開いたあと、顔を歪めた。

いや、と小さく悲鳴のような声を上げたあと、

「やめて、そんな言葉は聞きたくないわ！ どうしてなの、あなただつて私を愛してくれていたのではないの！」

言葉に出さずとも思いが通じていたではないかと王女は嘆いた。

そうだと頷ければ、どれだけよかっただろう。

悲しむ彼女を何物からも守るように慰めることができれば。

けれど、それはフレイヴィアスの役目ではない。

不実を詰る王女へと深々と頭を下げ続けた。

「なのに、それなのにあなたは私よりもあの王女を選ぶと、私より

もあの王女を！」

「……………お許してください、王女殿下」

王女は即座に許さないと叫んだ。

その声の強さに思わず顔を上げたフレイヴィアスの目に映るのは、赤い瞳に強い怒りを浮かべた王女だった。

先ほどの非ではないほど握られた手が震えている。

「許さないわ、フレイヴィアス」

「……………」

「絶対に私はあなたを諦めない。エリーザ王女が居ようとも関係ないわ。陛下に縋ってでもあなたの傍に居られるようにするから」

言い放つ王女の目はどこまでも本気だった。

言葉を失したフレイヴィアスの目の前で、ぐい、と手の甲で浮かんだ涙を拭くと王女は、

「私は諦めない」

ともう一度宣言し、しばらく跪くフレイヴィアスを見下ろしたあと、踵を返した。

揺らぐことのない真っ直ぐな足取り。

すぐさま控えていた王女の侍女が後を追っていく。

フレイヴィアスは静かに去っていく王女の背中を見つめることしかできなかった。

その背中が見えなくなると、フレイヴィアスは跪いたまま一度目を閉じた後、振り切るように立ち上がる。

『あなただっ て私を愛していてくれていたのではないの』

愛していた。

何よりも大事な一人の女性として焦がれ、求めた。

娶ることができないならば、連れて逃げることもすらも。

けれど抑えきれない衝動の時期は、疾うに過ぎ去った。

最早手に入れることを諦めてから久しい。

そんな今、王女の強い想いを嬉しいと思うよりも、困惑のほうが強かった。

これからどうなるか、考えるだけで気が重い。
それをふり払うように首を軽く振ると、フレイヴィアスもまた踵を返して後宮の庭を後にした。

夜半、王の警護を終え、帰宅したフレイヴィアスはいつも通り湯を使ったあと、妻の私室を訪ねた。

相変わらずドアを叩いても応えはない。
扉を開けて室内に足を踏み入れるが、中に妻の姿がないことにすぐに気付く。

いつもは中央にある長椅子に腰かけていることが多いのだが、そこに姿がない。

室内を見回し、もう時間が遅いためさすがに待たずに寝室に行っているのかとも思ったが、テラスへと続く窓が開いていることに気付いた。

もしかやと思い足を進めると、案の定テラスに華奢な背中があるのが見えた。

長い金の髪と白い寝衣が風でゆらゆらと揺れている。
妻はテラスの手すりに片腕を預け、下に広がる庭を眺めているようだった。

フレイヴィアスもまたテラスへと出て隣に並ぶと、ようやく妻は気付いたようだった。

ゆっくりと妻が振り返る。

「お帰りなさいませ、フレイヴィアスさま」
囁くような静かな声に頷きを返しながら、いつもの習慣で顔色に変わらないことを確かめた。

それから妻の顔を見下ろしながら、問いかける。
一日何をしていたか、と。

婚姻した当初は『何か不自由はありませんか』と決まって尋ねていたのだが、答えがいつも『ございません』というものだったので、

最近は何いかけを変えた。

そうすると妻は決まって、まずはちばちと瞬きをした後、ゆつくりと唇を開く。

「今日は、冬に備えて編み物を始めました。もうすぐ寒くなりますし、フェイアンの冬は厳しいとお聞きしておりますから」

「……ああ、フェイアンの冬はイーデンで育ったあなたには厳しいかもしれませんね」

フェイアンは夏は過ごしやすいが、冬は雪に覆われて身動きが難しくなる。

妻は極端に体が弱いわけではないようだが、やはりあの暗い部屋で何年も過ごしていたため体力がほとんどない。

気を付けなければあっという間に寝込むことになるだろう。

気を配るよう侍女たちに指示しておかなければ、と思っていると妻が、ですが、と口を開いた。

見下ろす妻は、眼差しをフレイヴィアスから庭へと移していた。

「雪が積もるのは、見てみたいと思います」

妻が希望を口にするのは、非常に珍しい。

希望など国が滅んだときに捨てた、と言わんばかりに淡々と日々を暮しているような妻だ。

よほど楽しみなのだろうとフレイヴィアスは思った。

確かにイーデンでは雪は積もらない。

恐らく今まで見たことがないに違いない。

「ならば、雪が積もれば雪遊びなどされるといいでしょう」

「雪遊び？」

妻が幼い仕草で小首を傾げる。

「ええ、子どもの頃よく雪だるまを作ったり雪合戦をして遊んだりしました」

さすがに大人になってからはしていないが。

妻にどういいう遊びか教えながら、幼い頃を思い出す。

広い王宮の庭で同じ貴族の子どもや世継ぎたる王太子、それから

王女と遊んだことを。

無邪気で何も気にすることなかったあの頃。

もうあの頃は戻ってこない。

「雪だるまを作ることなら、私にもできそうですね……」

フレイヴィアスの話に耳を傾けていた妻は一度考えたあと、そう呟いてフレイヴィアスを見上げた。

その白い面に微かな笑みを浮かべて。

「冬が来るのが楽しみになりました」

僅かな笑みではあったが、思わず言葉を失い見惚れてしまうほど美しかった。

普段ほとんど表情が変わらないからこそ、浮かんだ笑みが一層美しく思える。

婚姻を交わしてから初めて、ではないだろうか。

彼女がフレイヴィアスに微笑んだのは。

それは少しずつでもフレイヴィアスに心を許してくれている証のようだった。

憎まれて当然の妻が、歩み寄ってくれようとしていることがフレイヴィアスには確かに嬉しかった。

自分の中に沸く喜びの感情に戸惑っていると、妻が不思議そうに見上げてくる。

「フレイヴィアスさま？」

その声到我に返り、フレイヴィアスは取り繕うように口を開いた。「……長時間ここへいては身体を冷やしてしまいますから。中へ入りましょう」

素直に頷いた妻の華奢な背中をゆっくりと室内へと押しながら、フレイヴィアスは思う。

妻を娶ったのは、最初は命じられたものだった。

しかし一緒に暮らしていればその人を知っていく。

その人を知れば、様々な感情が湧き上がる。

ましてや身体を重ねる、という深い繋がりを得れば湧く情も小さ

くはない。

今はまだ妻を哀れだと思つ気持ちのほうが強い。

だがゆっくりとでも大事に愛する感情が強くなっていければいいと思つている。

自分へと歩み寄つてくれようと妻がしてくれる限り、それは遠い日ではないようにも思えた。

だから自分には妻以外の妻妾はいらない。

「もう休みましょう」

妻を寢室へと誘い、抱きながら脳裏に思い浮かぶのは王女の強い瞳。

『私は諦めない』

王が王女をわざわざ結婚させたばかりのフレイヴィアスへと嫁がせるとは到底考えられない。

それならば次に考えられるのは、自棄になった王女が実力行使に出てくる可能性だ。

どついつ手に出てくるかは、今のところ見当もつかない。

だがどついつ手に出てくるにせよ、フレイヴィアスが取る道はただ一つ。

妻を守ること。

「フレイヴィアスさま……あ、あつ」

華奢で強く抱くだけで壊れそうなこの妻を。

すべての悪意から。

傷一つ付けぬように。

「エリーザ」

脳裏に浮かぶ王女の残像をふり払うようにフレイヴィアスは、美しい金の髪に顔を埋めたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0580z/>

公爵と王女

2011年12月26日00時47分発行